

報みょうとく

題字 松川裕子

浄土真宗本願寺派妙徳寺
(安芸教区志和組)
発行責任 寺報編集委員会
東広島市八本松町飯田六〇二
電話〇八二四二八〇一四四



仏婦法座が開催されました

四月二十四日、仏教婦人会法座を開催しました。午前初参式、感染症拡大への不安から参加を控える方が多かったのですが、それでも感染防止対策の上で二名の赤ちゃんとそのご家族がご参加くださいました。久しぶりにお迎えする赤ちゃんを会員皆様さんでお祝いす



五月にご近所のある方から飼うことができなくなったからと鯉を十四匹寄付していただきました。前から池にいたものとあわせて三十八匹になりました。とても大事にお育てになっておられ、引き継ぐ責任を感じております。

鯉が増えました

池に入れた当初、鯉たちはそれぞれ戸惑い落ち着かない様子でしたが、ひと月もたった今はなじんでいてどれが新入りだったのか分からないくらいになりました。ひよっとしたら鯉の間でトラブルはあったかもしれませんが、なんとか気持ちのやりくりをしてくれました。話ししてくれないので本当のところは分かりませんが、鯉が話してくれないから、

寺院活動のための新型コロナウイルス感染症拡大防止の方針

安芸教区志和組13カ寺

趣旨
現在、地域の様々な活動・行事が、また本山別院・各寺の法座や行事も自粛あるいは短縮や中止などの判断をとっております。(中略)
今後私たちの法座の機会を守り寺院活動を消極的なものにならないために志和組法中で協議、感染防止対策をとりながらより安全な法座を開催することを目的として、あらためて次の5点を志和組法中の方針として申し合わせることにしました。

志和組法中としての方針

- [1] 手指の消毒設備の設置、マスクの着用依頼、室内の換気、飲食提供に対する配慮等、適切な感染防止対策を講じること
- [2] 3密(密閉・密集・密接)の状態にならないよう互いに配慮を心がけること
- [3] 大声での発声、歌唱とならないように配慮し、又は近接した距離での会話等を控えるように呼び掛けること
- [4] 参拝くださる方には事前の検温をお願いし、37.5℃以上ある場合は参拝を控えていただくようお願いすること
- [5] 相手の痛みを知る仏教徒として、感染者・医療福祉関係者やその家族などを誹謗・中傷・差別になる言動を厳に慎むこと

私のハレハレカ

いろいろな場面で「わかったぞ」と感じられたことがおありと思います。このような皆さまのご経験を「ハレハレカ(そうか!)」と題して掲載していきます。仏教や浄土真宗に関することでも構いません。皆様方からの投稿をお待ちします。今回は仏社会員の土屋隆生さんに寄稿いただきました。

籠を水につける

昔、学校で歎異抄講読会に在籍していました。しかし、歎異抄をお話しくださる先生のお話をいくら聞いても、なかなかピンと来ることがありませんでした。何度聞いても何も得ることができない虚しさ。あるとき先生にそのことを白状し



中に飛び込んでいたらいてくださる。ナマンダブと届いてくださる。いのちのお世話をするといいことは、思い通りにならないことをそのまま引き受けて決してあきらめずいつもはたらきかけ続けるということ。鯉たちの姿を眺めながらあらためて背筋が伸びる思いがいたします。

一語法話

『正信偈の十二光』

阿彌陀仏はすべての人を救うためにどのような仏になられたのか? 親鸞さまはその働きを『正信偈』で十二

の光とお教えくださいます。今回は十一番目の光「無称光」についてです。どのような働きなのか、親鸞さまのご和讃を通して味わってみます。

①無称光

前回の「難思光」で「阿彌陀仏の偉大なお力は、私たちの想像できるようなものではなく、心も言葉もたえはたえ私の想像を大きく超えた働き」と説明いたしました。また「私にとって不可思議な阿彌陀のはたらきを、不可称不可説であるにもかかわらず釈尊はお経の中で言葉を尽くして知らせてくださる」ともお話ししました。

た時のこと、毎回必ず出席していた私に同情してくださった先生(こだわりの強い私に辟易しておられたであらうと思うのだが)は、蓮如上人御一代記聞書にあるこのお言葉を紹介してくださいました。

蓮如上人に信者の方が、一生懸命に説教を聞いているのだがなかなか理解ができないこと、分かったつもりでいてもその内容を帰り道で思い出すことができない、どうしたものではないかとお尋ねになったときのお答えの言葉が「その籠を水につける」です。上人が私に向けてお諭しくださっているのと有り難く受け止めることができました。

行事予定

新型コロナウイルス感染症リスク軽減を目的に法座回数を当面減らすこととしています。ご注意ください。

八月五日(金) 午前九時より 法座
午後一時より 物故者追弔会、法座

盂蘭盆会(うらぼんえ)

講師 大和町椋梨 明圓寺
内藤 良誠師

八月六日(土) 午前八時
広島原爆記念日

(本堂でお参りの後、みんなで梵鐘を撞きます)

九月十五日(木) 午前九時、午後一時

秋彼岸会(あきびがんえ)

講師 志和町内 西方寺
安國 真雄師

十一月二十五日(金)

午前九時、午後一時

報恩講(ほうおんこう)

講師 世羅町甲山 正満寺
島津 恵航師
(詳細は次号でお知らせいたします)

私たちは目に見えないものは「無い」ものと思ひ、見えるものだけに囲まれて安心しようとしています。その目に見える「有る」ものにはそれぞれに名前があります。(次頁へ続く)

その色はどうか、形や大きさはどのようであるかなど、自分が理解できるように要約して把握しようとしています。しかし、名前を付けて自分の理解

(前頁からの続き)
 で捉えようとした瞬間にそれは自分の理解上のものとなり、そのもの本来のものとはかけ離れてしまうこととなります。難思議な仏のはたらきについても私の計らいをはるかに超えたものであって、それを言葉に表した途端に、私の計らいのもの、思い描けるもの

「藝州賀茂郡飯田村」

「獨歩行」

竹本省三

其の十一
 飯田村は戦国動乱の舞臺

この村にもたらされた動乱の実像を紹介します。

▼天文五年(一五三六)、平賀興貞(弘保の嫡男)は尼子方に転じたので、大内義隆は弘保に知行を与へ、援軍を派兵し懐柔策を講じた。

▼天文九年(一五四〇)、陶隆房は元就に命じ造果要書で興貞を攻めた。興貞は竹林寺へ逃げ込み隠居。

▼天文十二年(一五四三)義隆、雲州尼子攻めに失敗し、敗走之時、小舟が転覆し養嗣子晴持を溺死させた。

▼天文十八年(一五四九)四月廿二日、元就は次男元春と三男隆景を連れて山口に向き義隆に謁見した。元春の吉川家相続の裁許であった。この日の宴の後、元就父子は義隆と陶隆房の異様な確執を知った。謀反が起きれば、隆房は元就に大内残党の処分を命じるに違いないが、当面は

なつてしまい、本当の仏を見失わせてしまうことになるのです。

なつてしまい、本当の仏を見失わせてしまうことになるのです。

神光の離相をどうかすれば無称光となつてたり
 因光成仏のひかりをば
 諸仏の嘆もさうなるなり
 (親鸞聖人「浄土和讃」)

私は私の理解を超えたはたらき(神光)であり、すがたかたちをこえて(離相)いて説き及ばないから「無称光」ともお讚えします。この無称光によつて(因光)私を仏にしてくださる(成仏)はたらきを、ほかの多くの仏は褒め讃えてくださるのです。

きない、私の計らいを超えた真実の世界が確かにあって、それが私をしつかりと足下から支えてくださっていることを、こうしたお言葉の中から知らせていただきたいと思います。



合同墓・墓地案内

有縁の皆さんでおまもりしている合同墓と一般墓地があります。たくさんのお方にご利用いただけます。

妙徳寺ホームページ

http://myotoku-ji.sakura.ne.jp/

更新し内容充実するようがんばります。みょうとくチャンネルもたまにご覧ください。



隆房に従うことが得策と心得た。

大内家の為に東奔西走していた陶隆房は、御家の行く末を案じ、諫言を盡したが、悉く退けられ、その挙句、謀反の疑いをかけられたので、居城岩国若山城へ引き上げ、ここで愈々決起の体制を整えた。

▼天文廿年(一五五二)八月廿八日、隆房は若山城出立時に、決起状を元就と弘保に送った。弘保はこの書状を元就に披露し恭順の意を表した。

▼廿九日、隆房、杉重矩、内藤興盛らは山口に乱入。

▼九月朔日、義隆は隆房の謀反が迫り仙崎迄辿り着いた。ここから海路で九州へ逃れようとした。響灘は既に冬、止む無く引き返し、湯本大寧寺に入った。隆房に包囲され、随行者と歌を詠んだ後、自ら一族も生害。京から呼寄せた公卿も処断。

※義隆は悪戯に公卿の風尚を慕い、分国統治から乖離させて、暴発を察知することも、防ぐことも出来なかった。重臣達の愁訴も無視した。武断派の払拭し難い不信感が鬱積

し、決起に及んだ。

▼四日、隆房の命で、毛利軍は平賀隆保が籠る高屋保頭崎城を包囲。隆保は城を捨て、槌山城へ奔った。(地誌では頭崎城で自刃したとある)隆保は美父母木氏の遺言状を基に大内から平賀への押付け養子であった。弘保、広相は白山城から一步も動かず静観した。

▼八日、毛利軍は飯田村に着陣。戦の休養と次の戦に備へた。隠居していた元就は吉田郡山城に居残り、背後の憂いに備えていた。当主隆元は飯田土居屋敷、次男・吉川元春は城佛土居屋敷で休息したであらうことは想像に難くない。総勢四千余といわれたが、四割は兵站要員(武器や兵糧運搬・賄)である。雑兵はそここの百姓屋の軒下で秋露を凌ぐ。既に収獲を終えた百姓は、僅かな干飯・稗・粟を携へ、天林山で息を殺し潜んでいた。煮炊きは白煙が登るので半時、水に浸して掻き込み、時が過ぎるのを待った。毛利軍が引いた後は、何の被害もなかった。その理由は次にあった。

し、決起に及んだ。

毛利軍の軍紀には、「軍勢狼藉の儀、堅く制止を加うと雖も、更に停止無きの条、向後に於いて、この申合つ衆中人等、少しも狼藉あるに於いては、即ち討果すべき事」とある。軍法違反はその狼藉者の上使の裁許を得ずとも即刻、元就が処するのである。

▼十一日早朝、飯田村を立ち、槌山城を包囲。毛利軍が圧倒的有利であったが、自軍の先陣争いは壮絶を極め、その勢いを抑えることは出来なかった。

▼二十八日には落城。その籠城戦で余多の大内方武将(隆保など)は切腹。

※隆保は山口の大内文化で育ち、文武具備つた稀代の武将と持て囃されたが、戦局を予見することも回避することもなく、唯運命を甘受し、辞世の句を残し壮絶な最期を遂げた。如何にも武士の所作として語れる節もあるが、家族や家臣に対する慈しめは微塵もなかった。

▼十月七日、元就、隆元父子は平賀家を再興させる為、隆保を家筋から抹消せしめ広相を第十八代当主と認めた。そ

れ以降平賀は毛利の軍門に下つた。

▼天文廿一年(一五五二)、菅田光則降伏して槌山城は落城した。

飯田村に滞在した八日から十日迄の軍費を検証する。兵一人に付き一日五合(玄米)を支給されるので、八十石、現在のお金に換算すると概ね六四〇万円となる。その他、諸々の費用が加算されるが、紙幅に限りがあるので割愛する。元就が西国一の覇者となつた理由は戦に長けていたばかりではない。完璧な戦略を弄した軍事戦略を見逃してはならない。又、軍議を諮り衆議を募つた。着座しても発言せず、その場凌ぎの者は、再び元就の御前に罷出る事を許さなかった。

▼天文廿四年(一五五五)、隆房は元就を誅罰する為、敵島に渡航し陣を張つた。その夜、突然、暴風雨が島を襲う。元就は対岸の東から渡航し、島の反対側(南)から險阻で狭い峠を越へ、背後から迫つた。予期せぬ夜襲に陶軍は陣中で大混乱に陥り、そこに小早川隆景軍が正面から突

いた。逃げ場を失つた隆房は西方の山中に逃げ込んだが、遂に諦め自刃を選んだ。



「平家物語」を奉化する。

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の如し、猛き者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ、(中略)政にも違わず、楽しみを極め、諫めをも思ひ容れず、天下の荒れむ事を悟らずして、民間の愁ふる所を知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者共哉。・・・伝へ承るこそ、心も詞も及ばね。」

夥しい数の人々が、壮絶な生き様から語りかけている。こうした歴史を知らなかったで遣り過すこともできるが、知っていれば人の営みの本質に触れることができる。

志和組テレホン法話「みのりの電話」

082-433-4989

7月 1日	~	寿福寺	田中 真
7月 11日	~	浄蓮寺	沼田 典生
7月 21日	~	西方寺	安國 智乗
8月 1日	~	善正寺	武田 昭峰
8月 11日	~	長松寺	笠岡 淳一
8月 21日	~	天龍寺	天野 英昭
9月 1日	~	寿福寺	田中 幸恵
9月 11日	~	報専坊	松島 純以
9月 21日	~	照榮寺	井口 英隆

志和、八本松川上地区の本派寺院13カ寺のテレホン法話です。3分程度のお話を24時間いつでもお聞きいただけます。ぜひ、電話でもお聴聞してください。

「写経の会」開催予定日

7月 22日(金) 8月 26日(金) 9月 23日(金)

それぞれ午後2時より
 申し込みは 代表_西本さん(428-2466)、または妙徳寺へ

「生きていくための仏の教え仏教基礎講座」

7月 9日(土) 8月 27日(土) 9月 10日(土)

それぞれ午後2時より
 申し込みは 代表_廣川さん(428-5935)、または妙徳寺へ

「妙徳寺仏教壮年会例会」(原則毎月第2土曜日)

7月 9日(土) 午後6時より 定例会/23日夕 懇親会

8月 27日(土) 午後6時より 定例会

9月 10日(土) 午後6時より 寺報編集会議

「書道教室」

7月は1日,8日,15日,22日、8月は5日,20日,26日の各金曜日(稽古日)です。9月以降の予定については後日お問い合わせください。(午後2時半~午後5時の間)



金谷雷聲先生(蓄門会)による幼児・児童・大人対象、硬筆・毛筆教室です。申込は金谷先生のFAX0823-82-9565、または妙徳寺へご連絡ください。

「おみのりサロン」開催予定日

7月 28日(木) 8月 24日(水)
 9月 26日(月) 午後2時より1時間半
 (住職が本堂に待機、相談を受け付けます)